

代表取締役社長

鈴木 章弘

AKIHIRO  
SUZUKI

株式会社風力エネルギー研究所

【東京都港区】

# 風力発電の知見を未来につなげる

設立 2004年10月  
売上高 2億5000万円(2020年6月期)  
銀行取引店 三菱UFJ銀行新橋法人営業部

再生可能エネルギーが世界的に注目を集めるなか、2004年から風力発電に特化して事業を展開してきたのが風力エネルギー研究所だ。風車の設計・開発から風況解析を含む発電所の計画策定支援コンサルティングまで、その事業領域は幅広い。

レゴブロックによる風車の模型とっしょに。「ばらつきのある風の力から安定的な電力をつくるというのが、最も難しくまた面白いところです」



まずは、風力発電事業を起す  
に至った経緯をお聞かせください。

そもそもは、京都大学の学生時代に、高槻市にあった大学の農場で風車に出合ったのが最初です。当時は核融合発電のような高度な技術に強い興味を持っていたのですが、そうした巨大プロジェクトでは電気が生まれるまでの過程全体を自分が見ることができません。風力発電は、実際に風で風車が回って発電するまでのプロセスを肌で感じられることに魅力を感じました。

大学卒業後は米国コロラド州立大学の大学院で風工学を学び、三菱重工に入社して風力発電機の設計・開発に携わりました。その後、さらに研究を進めたいと、再度アメリカに留学して国立研究所やコンサルタント会社に勤務しながら博士号を取得、帰国後に大学や風力発電事業者での勤務を経て自分で会社を立ち上げました。

研究者から起業家への転身に、  
迷いはなかったのでしょうか。

会社勤めをしていたときから、単に風車(ブレード)を製造するだけでなく、発電所の設置場所を検討し

たり、地権者と交渉したりといった業務にも興味を持っていました。自身の性格もあると思いますが、「できることは一人でやってみる」というのが性に合っているのかもしれない。風力発電はまだまだ発展余地の大きい分野ですが、そのすべての領域を一人で見渡せるというのがあります。

事業を進めるうえで、とくに心がけていることはありますか。

「まずはやってみる」「迷ったらとっろあえず動いてみる」ということでしょうか。繰り返すしになります。風力発電はまだ新しい分野なので、世間一般で広く行われている、引き合いから見積もりを作成して価格や納期を調整し、受注と同時に着手するとうような仕事の進め方がそぐわないことが多いです。

たとえば最近注目を集めているものに「浮体式洋上風力発電」があります。海底に固定せず、海上に発電施設を浮かべる方式なのですが、ブレードの性能や風向・風力はもちろん、波の影響などを考慮すべき要素が非常に多く、「こんな場所にこんな発電所を造れないか」という相談が

来ても即答するのは難しいのです。

まずは、依頼主と議論を重ねたり、自分の知識を総動員して考察をしたり、とっろあえずプログラムを書いてシミュレーションをしてみたりと試行錯誤してみます。そうしたなかで解決の糸口が見えてきます。楽観的と思われるかもしれませんが、どこかで「できそう」と思えば、最終的には何とか形にすることが可能なのです。どうしても解決の道筋が見えない場合は、「できるかどうかわかりませんが、いっしょに考えましょう」と依頼主を巻き込んで解決策を探ることもあります。

日本における風力発電の現状と  
自社の今後の事業展望をどのように  
描いていますか。

発電量という点では、日本は世界的に見ても少なく、なかなか普及していないのが現状です。産業としても、当初は私が所属していた三菱重工をはじめ大企業が参画していたのですが、採算性の問題からほとんどが実質的に撤退してしまいました。しかし、風力発電機には2万点近くの部品が必要になるのですが、ベアリングをはじめコア技術の多くを日

本企業が保有しており、まだまだこれからだと私は考えています。

再生可能エネルギーは自然の力を利用しているため、燃料を必要としないのが最大の特徴です。風力発電に関しては、とくに長期にわたって稼働させられるのが重要になります。一般的に耐用年数は20年といわれていますが、その間、絶えず動き続けているわけですから、構造物として精巧で長持ちするように設計・製造することが求められます。そういう意味では、日本企業のモノづくりの強みが発揮できる分野といえるのではないのでしょうか。

私たちの会社は、風車の設計・開発や設置場所の風況解析など、風力発電の技術コンサルティングが中心事業ではありますが、規格策定や許認可に関するコンサルティング、市場・技術調査やプロジェクト全体の技術デューデリジェンスまで、風力発電に関するあらゆる領域を網羅していると自負しています。補助金ビジネスではなく、あくまでも本来のビジネスとして風力発電が発展していくために、私たちが培った知見を役立てられたらと願っています。